

設問 I

ハーバースマスによれば、近代初期には市民が社会的合意を目指して公共的な議論を重ねていたが、資本主義社会が定着すると人は消費を通じて公共性に関わるだけになった。こうした事態を受けて彼は公共性を再構築すべく、人々の理性的な議論を軸とする熟議民主主義を提唱した。しかし、この議論の「正しさ」は全ての人々に理性的存在者として振る舞うことを強制する点で構造的な問題がある。一方、ロールズは社会契約論に基づき、人間は自分の社会的条件を知らない状態にあるとき、誰にとっても住みやすい社会を望むはずだと論じた。だが、この自由と平等に基づく「正義」もまた、全ての人にリベラルな理念へのコミットを強要するものである。リベラル派が追求した普遍的な正義の可能性を検討するためには、自由と平等という権利の正しさにまで掘り下げて考えなければならない。

設問 II

貧富の差が生じる資本主義は社会主義者には「正しくない」制度に見え、自由を尊重する者の目には衣食を制約する宗教的戒律が「正しくない」因習に映る。このように、社会の構造が異なれば「正しさ」も異なるのだが、これを突き詰めていけば、人間の数だけ「正しさ」があるということになる。

こうした問題を解決するためには、上からの強制によって公共的な「正しさ」を構築するだけでは不十分である。「公」を「共」に創っていくためには、各人が自分を他者と交換してみる想像力が必要だからだ。そこでは、「いま・ここ」を離れてどんな他者にもなれる文学の体験が重要となる。文学的な体験は、書き手や登場人物といった自分とは異なる存在の思考や心情に寄り添う経験である。そこで培われる未知なる他者への想像力こそが、上からの強制とは異なる、自発的に他者を理解し、他者とともに「正しさ」を築くための議論の礎になると私は考える。